

①

享和とあらたまりぬる年、難波なる推銅の座に

のぞむべきおほせ事承りて、二月廿七日卯の刻

すべるところに出たつ。兒俣こしほ・弟栄石島崎・甥義

方吉見、その外親しきものこれかれ、旅よそひして

送れり。折から雨そぼふりて、渭城の塵も潤う

ばかりなるべし。市谷・赤坂をすぎ、赤羽根のはしの

前なる立場に休ふ。品川大仏の前なる鍵屋といへる

高殿のにて酒くみかわし、あるは歌よみ、詩つくり、聯句

などして、別おしまぬにしもあらず。爰にて送り来れる

ものをかへす。兒俣・宮原氏ばかりは、大師河原に遊ぶ便の

よしとて大森まで来れり。爰におくまりたる茶店あり、

数寄屋河岸のすきものどもまちつけて、小竹筒・みさかな

との出ですゝむ北川嘉兵衛・大坂屋甚兵衛・石淵五郎兵衛・大塚農夫などなり。十久（千）亭

助万屋の主じは、をくねたりとて、息もつきあへずして

追来れりよし。一盃の酒を尽して肩輿のうちに

ねぶり給ひねかしといふにかゝりて、酔心地に人々と

別れて、肩輿に乗り、六郷のわたり新にのぞめる頃、同里

の三子井上子瓊左衛門・鈴木猶人文左衛門・辻知篤忠左衛門、送り

来りて手をわかづ。あかずかへりみがちながら、つゐに輿に

②

ゆられて臥しぬ。従者なるものや、目さまし給へ、こゝは

金川（神奈川）の臺にて候といふに、驚きて輿の簾をかゝげ

みれば、東南は海はるかにして、本牧のかたに、弁天の

森みゆ、いにしへ明和四のとし、四溟陳人・南條山人などと

ともに遊びし事思ひ出るも三十年あまりのむかし

にて、予がまだ十九歳の頃なりけり。金川の橋を渡りて

浦鳶観世音に常燈あり。洲崎大明神の社、勝軍飯

綱大権現の宮を過て、富士浅間の人穴あり。本町

のはしをわたれば、程ヶ谷の宿つゞきなり俗に棒鼻と云。右に

「圓海山道」の碑たてり。中の橋をわたたり、右がはなる

沢瀉屋彦右衛門といへる宿りにつく。酉の時に近し。

床に掛し画に夷曲うたあり。

くだびれて やうく足も おもだかや

よい程がやの宿をとりけり

いかなる人にやとおかし。

廿八日、雨はれ曇りて、ほのくらきにいでたつ。宮ヶ谷村

より左へ折れ、坂を上る。権太坂といふ。松の森あり。

中里村を過て、境木村の立場にいたる。地藏堂あり、

是なん武蔵・相模の国堺なるといふに、はじめて

異郷にいりぬる心地せらる。焼餅坂を下りて、左の方に

永谷八郷の惣司天神山天満宮にゆく道の碑立り、

日本三体のひとつなりといふ。信濃坂を下れば左に

尼將軍御本尊正観音堂あり。又坂東十四番の観音に

ゆく道あり。かし尾の立場にいこふ。このあたり、左右

の山のたゞすまい、都下のけしきに様かわりて、垣ほ

の桃くれなひに、野菜の花黄なり。下飯田村と福田村

の間にて、筵つゞみの長持引つゞき来れり。「阿蘭陀人

③

献上物」といへる札たてたり。四夷八蛮も驛をかさねて

来たる事、おさまれる代のいさおしなるべし。桃青翁の

ほくに、「阿蘭陀も 花に來にけり 馬に鞍」といふ事

事などおもひあわせらる。右に「大山路」、「為ニ五處橋供養」

とかける碑見ゆ。左に十九番櫻堂觀音堂あり。松間

をすぎ、土橋をわたり、戸塚の宿に在るに、雨ふりきぬ。

左に觀音堂あり。行基菩薩の作なりといふ。右に

淡鳥明神の道あり。左に鎌倉道あり。此所より鶴

ヶ岡迄二里ばかりとなん。吉田橋をわたり、伊勢屋源七

といふ者を問向ふ、問屋のむかひにすめり。とし頃和書

多くたくわへたるときくにたがはず、去々年、金沢

文庫の印ある尚書正義卷、公にたてまつ

りて、金五両を賜はれるよしなどかたる。萬代和哥

集・月詣集ユキヨシなど、北川氏よりかりし事ありしに、此

人のもてるふみときけり。高とのに折からの難あ

そびの調度めくものたてわたして賑はし。茶など

煮てすゝめんといへど、さきを急ていづ。左に鎌倉道

の碑あり。天王の宮八幡の宮あり、所の鎮守也とぞ。

一番坂・二番坂といふをこへつゝゆけば、松の林あり。この

あたり、松露多しといふ。白こ子この臺といへる所を俗に

女殺しといふ。一年旅人の女を殺せる所なりと、輿かく

ものゝいふに、あたりを見れば、人家なし。物すこき事

いわん方なし。やぶくゆきて右に青陽院専念寺に

行道あり。又富士浅間の社の内、松原を過て立場

あり。かげ影取りといふ。右に智證大師の作とて給ふ

不動尊にままする道あり。左の方の岨に一本のさくら

といへるわたりは、老杉雲をしのぎて高し。藤沢の

宿にいたり、橋をわたり、道場坂を上りて、小栗堂に

いたる。照手姫尼の像あり。左右に懸ものをかけたなり。

左は十人殿原の像、右は小栗の事かける繪成べし。

いずれも古雅にしてあらたなるものとは見へず。

十人の名を書付く。

後藤兵助助高 片岡加太郎春教 田鍋平六郎長秀

同 大八郎高次 同 加次郎春高 同 平八郎長為

水戸小太郎為久 風間八郎正國

風間次郎正貞 池庄司成長

小栗満重の事、あまねく人のしる所にして、正しき

説を見る事なし。十人の名もいかならん、おぼつかなし。

什宝に鬼かけの轡・崇寧通宝の錢・天狗の爪・古鏡

などありといへれど、うきたるものみんもよしなしと、

見ずして出ぬ。山間の墓原をへて、藤沢山清浄光

寺の裏門より入てみるに、本堂・觀音堂・鐘樓・経蔵

などつきくし、方丈のかた見ゆるゝに、上の方に富士

見の亭高し。かの白川侯のかゝせ給へる清音の額も

この処なるべし。堂の側に桜咲出たり。三門をいで、

額をあほぎみるに、「藤澤山」と有り。從二位藤原の通

基卿のかゝせ給へるとぞ。藤澤の宿屋つくりよろし。

白旗大明神の社ありしときゝしが、輿かくものいそぎて

見過しぬ。左に弁才天の息居ありて、「江の島道」と

いへる碑ありニツはか。右に松山あり。伊賀屋の山なり

といふ。此あたりにすめる武右衛門といへるものは、此村の

大姓にして、山多くもちたり、など輿かくものかたる。右に揚柳観音の堂あり、慈覚大師の作なりと

いふ。車田を過てひき地川をわたる。小栗殿の乗れる車を洗ひし所なれば、いつも水濁れりと云。

薬師堂あり、毘首羯摩の作なり。道の左に田あり、池のごとし。常光明山道あり。よつ屋の立場を

こへ、二つ屋などいふ所にいたる。右に大山道あり。是迄御代官大貴次右衛門の支配する所にて、赤羽根村より

西は木原長左衛門知行所といへる傍示杭の内、松の並木のかげをゆきく、十景坂を過れば、右に大山高

くみわたさる。都人のあざらけき魚の鱸なすへひたるとて、のゝめきいふ。南郷の立場是なりとききて、名も

なつかしき江戸屋といふ家にいれば、げにあざらかなるひしなといへる魚の鱸もて来れり。雨波な(皮)いる

籠のうちに、携へ来りし酒樽とりで(だ)し、みさかなに箸さしたつるに、味よあじのつねならずぞ覚えし。

松露まつといへるものは、みつ、よつ、いついこそあつにすなれ。うるしの色も衰へたる椀に、うづたかうもりたり。さすが

にひなびたり。橋をわたりて右の方に大鳥居あり、鶴ヶ岡八幡宮にまうまでぬる道なるべし。右に町屋

山桜雲寺路といふ碑たてり。町屋川の橋をわたる。町屋橋といふ。此みなかみは相模の淵といへるとぞ。右に

上國寺、信隆寺などいへる法花寺みみゆ。今宿橋を渡り、中鳶村を過つゝ、馬入川にかゝる。水浅くして砂清

し。此川は古の相模川にして、彼鎌倉どの、正治元年の事など、おもひ出らる。平塚の宿をこえ、元花水の

はしといへる土橋をわたりて、名におふ花水橋を渡る。

⑥

高麗寺村に入れば、右に高麗寺山たかく聳へて、み

どりの色ちかし。左に山下善福寺御旧跡あり、浄土真

宗の寺なるべし。まことや化粧けわい坂といへる。名のみことく

しうきこゆれど、つまづくばかりの蟻あ塚つにひとし。

むかしは此ところより半里ばかり入りたる所なり

しを、街道のうちにつせるなりときくにぞ、げに

さもと思はる。此あたりに牝(虎)御前のやしき跡など有

といふ。大磯の宿を過ぎて、名におふ牝御石みんと延臺

寺に入れば、鬼子母神堂・牝池・財弁天の宮あり。石に

太刀疵・矢疵といへるものありて、曾我十郎が身がはり

にたてるなど、寺僧のかたるも覚えなし。寺は延山十

九世法雲院日道上人、慶長年中に創造せるとぞ。

「十郎慷慨愛於菟」といへる羅山子の詩句もおもひ

出られておかし。橋をわたりて、かの三千風がいとなみ

しといふ鴨立菴(庵)にいり、西行法師の像をみる。庵の

中に短冊あり。

あはれさは 秋ならねども しらねけり

しぎたつ沢の むかしたつねて 雅草拜

これは飛鳥井亜相のなり。また、

宝永二年の秋となりけるとき

いまも猶 むかしの秋を 思ふぞよ

鴨立さわの タぐれのそら 兼臣

これは松平左近将監とて、享保の頃、政とれる人

なるべし。又色帯（紙）あり。西行法師の筆なりといふ。

つれもなく なりゆくの 言の葉は

あきよりのさきの 紅葉なりけり

⑦

西行の杖なりとてあるは、なくてもありなん。例の三千風がかな文、かたへの右に系（彫）りてたてり。笈さがしとい入るもの見侍りし事ありしに、三千風が哥に、

あし世の 鳴の羽音は やもなくて

いまは沢邊に 馬駕籠ぞたつ

といへるこそ、中々まことの風情ならぬ。すこし興ざめたる心地して、西行堂のしりへより海つらを見わたせば、げにこゆるぎのいその波たち、さりがたき所なり。此庵なからましかば、あはれさもまさりぬるべし。やゝゆきて小磯宿なり。右に西國三十三所観音の道あり。

切通しを過て、左に身代地蔵尊たてり。行基菩薩

の作なり。土橋を渡りて、右にたかとり山あり、松の一むら高くみゆ。国府新宿とい入る立場は、むかし

の国府の跡となん。土橋をわたりて右に吾妻権現の鳥居あり。吾妻山高くそびえて二町ばかり入だ

てり。此神をいのるには、夏は綿衣をき、冬は帷子（細）をまとひて、山の上にもるといふ。王充が夏炉冬扇のことはもおもひあわせられておかし。松の林の中に鹿松とい入る松あり。枝かれて節多し。いかなる故にかやしらす。右のかたに梅沢山東光寺あり。

古木の藤かれて木をまとへり。ならばしに藤まき寺といふ。医王堂あり。梅沢の立場は、南郷につぐきて

賑は入り。坂を下り土橋をわたる。押切の橋といふ。川の名なるべし。「是より西小田原領、東川越領」とい入る傍示あり。ゆきくして左の海つらをながむれば、打よする浪の音高し。左に「親鸞上人御旧跡御勤堂、越後國

⑧

蒲原新瀨」とい入る碑あり。右に帰命堂國府沢眞楽寺あり。是また同じ旧跡なるべし。左に法秀寺とい入る法花宗の寺あり。土橋をわたれば、右に大権現の道碑あり。是より三里ばかりありといふ。酒匂川の水落て瀬浅し。土橋三つあり。三月六日には橋をひくといふ。河原廣くして蛇籠などもみゆ。かの梶原が「ければぞ波はあがりける」といひけん鞠子川も是なるべし。山王の橋のほとりにて日暮ぬ。小田原の宿より出向入て、「小田原宿御用」とい入る挑灯高く両行にかゝげて先を拂ふ。やゝ城下にいれば、右の方に番所あり。宮の前とい入る何がし屋源四郎が家にやどりぬ。けふの道十二里にあまりて遠ければ、従者もつかれしにや、躰かきてふしぬ。

二十九日 よへより雨こぼすがごとくふりてをやみなし。けふは名におふ箱根の山こえんに、かくてはあゆみくるしかるべし。夜明ぬほどは、つい松の火もうちけたるべきなど、従者のかたみにいゝあへるもことわりなり。

これ王尊が馬をいさぶ所とおもひおこして、卯の時の酒二つ（杯）きばかり傾け、従者にもませて出たつに、夜はほのぐくと明わたりて、雨もやゝをやみぬ。城下のさまにぎはゝし。右のかたに八棟づくりの家

みゆるは、名におふ卯い郎（外郎）の薬うるなるべし。右に
 大手あり。惣門を出て右にまがり、左に折れて山口
 にさしかゝる。右に地藏堂あり。是より巖石を右に
 し、谷川を左とす。是早川の流れなり。川のほとりに
 菜圃あり。黄花こがねをしくが如し。西南に石橋山

⑨

たかくそびえ、伊豆の海はるかに見わたされて、風景
 いわんかたなし。風祭の立場にいたる。人家あり、入宇田
 といふ所より右のかた、長輿山浄泰寺にゆく道

あり。猶も山を右にし、川を左にしてゆくに、ふむ所
 石ならざるはなく、山崎到下をこえ、三枚橋をわたる。
 右に湯もとに行道あり。一むら竹のかこひひして

何がしの莊園にやと思ふに、門前に下馬札有て、

「金湯山」といふ額あり。朝鮮国雪峰書にて、方丈の
 額も同じ筆なり。これ早雲寺なめりと。輿より下り

て入るに、糸桜咲みだれたり。鐘楼の銘をさぐり
 みるに、文字摩滅して、わづかに元徳二年の四字

みゆ。ふところをせし蟬墨もてうつす。北条五代の
 墓はいづこと僧にとひ、書院の庭より入りてみるに、
 苔むしたれど、文字あざやかにみゆ。後（い）となみ、
 たてしものなるべし。齋の七十餘城にもを（ま）くらざり

し勢を思ふに、涙もとくまらず。「臺殿松杉入空王翠」
 と、南郭が詩つくりしもむべなりけらし。書院の障

子に龍馬（虎）の画あり。古法眼の筆なりといふ。寺を
 いでて湯本の立場にいこふ。爰に轆轤もて挽もの
 せし器あまた、さゝやかなる遊びものなど、みせに

列ねて、めせくとす（動）む。故郷のうま（孫）この家づとに
 もと、二つ三つかいて、輿のうちに蔵む。谷川橋を渡り、
 しあげ坂、沓わり坂などをこえて、又土橋あり。此あたり、
 左は山ぎしに浴ひ、右は谷川にのぞめり。むかひに
 山高くしていく重とも知らず。川ばたといふ立場に
 いこふ。左に地藏堂あり。かゝる所にあが佛（尊）とたのみて

⑩

鉦うちならず道心を見るに、いとあはれなり。すくも
 川にかゝれるすくも橋を渡れば、山ぎしを右にし、
 谷川を左にす。猶さがしきにのぼれば、女ころばしと
 とかやいへるあたりの、左の岸に一つの石あり。曾我
 五郎が割石とよぶ。大沢の石橋をすぎ、猶右の

かたの山ぎしにそひ、左の方の谷川にのぞみつゝ

ゆくに、陸放翁が「山重水複疑し無し道、柳暗花明又一
 村」といへるごとき立場あり。畑といへる所なり。輿かく
 ものもつかれ、従者もやみぬれば、しばらくやすらはん
 とするに、立つらねたる酒屋のうちより、女どもの

むれいで、百千鳥の囀るごとく、「是（い）こわはせ給へ、
 「かれにあがり給ひね、なごロクといふめり。葦屋といへ
 るやどにたちいりて、鮎（か）あさり、酒飲む。欄干によりて
 見れば、上に千重の山そびえ、下は不測のたに（い）のぞ

む。心なき雲は岫を出、友をもとむる鳥は霧に
 むせぶ。今朝風まつりの邊より雨やみしが、こ（い）に

いたりて全く晴れわたり、停午（て）の日の影、はなやかに
 さしいづるにぞ、つかれもやみ、心いさみぬ。右の方に
 大なる石あり。皂角坂（さ）・かしの木坂（き）・猿すべり（い）・てうし

の口など、さがしきにさがしきをかきかねて、やゝ平かなる老が平といふ所にいたる。こゝにあづまや立て、あま酒ひさぐものあり。しばらく輿より下りてあゆむに、右に二子山ちかくして禿山なり。石のみありて草木の類なし。左にみゆる山を文庫山といふ。むかし文庫の蓋とりて、かしこになげしかば、ふたごやまとなれるなど、輿かくものゝかたるもおかし。お玉坂と

⑪ いへる所は、罪ある女の刑せられしゆへに、かくいふとぞ。しろ水といふは、もと城不見とかけり。昔みやこより使きたりて、此箱根の山にゆきなやみて、小田原の城見ずにかへり。その上使を迎へに出し所を、上使口といふは詛るなり、など輿かく者のいふも夢の中に又、夢うらなふ心地す。右のかたに箱根権現に行道あり。三町ほどゝきけば、輿を先なる出口にさきだゝしめて、村の童をあないとし、ほそき道をたどりゆく。よべの雨に道うるほいたれば、履を著てあゆむ。謝公東山の履にもをとらざるべし。左に芦の湖うしほみたくえて、汀に大きな釜二つあり。山を右にし、湖を左にしてゆけば、むかひに東福寺あり。右のかたに石坂たかくみえて、権現の社銅瓦ぶきなるべし。関こへぬ間は先をいそげば、遙にふじをがみつゝ、もと来し道にかへりて、地蔵堂の前まへにいづ。さの河原とかいゝて、法師の鐘打ちならし、念佛唱ふる聲けうとし。姫路の太守のみたちにつかふる、高須氏に行きあひぬ。「馬上相逢無紙筆」といへるからうの

心なるべし。猶くらき坂をのぼり、御関所をまもれる者のかたに、従者を以ていひつかわせしに、すでに問屋のものよりいひおこしぬれば、改めていふにおよばずといふにぞ。笠ぬぎ、中貫なかぬきの沓はきて、関を過ぐ。長持の櫃はすでに先立て通りぬ。是より輿にのり、湖を右にし、石橋をわたりゆく。左右に寺などみゆ。宿のさままひなびて、湯本・畑の立場にはたちもおよばず、左に「紅藤庵」といふ額みへしは、寺にやあるらん。此あたり、夏も蚊蠅なしときぐ。

⑫ 風越の臺を上り、はちが平にいたれば、霧深くして左右をみず、張公が五里の市もかくやらん。爰は相模・伊豆の國境にして、式本の杉たてり。右は焼たる山のごとく、左は深き谷かとあやうく、ふむ所の石あらじ。古木・老杉、木末をまじへて物すこく、衣の袖も冷にうちしめりたるに、雨さへふりいでぬ。大かれ木、小かれ木などいふわたりより、輿の戸さこめて跨り居るに、輿かくものも石につまづき、息杖たてゝ、やうくに下りゆく、輿のすそに、はらくと音するは、小篠の多きなり。これなん箱根竹とて、都人の煙管に磨き用ゆるものなりとぞ。ゆきくてあづまやあり。前に石をたゝみて庭めきたり。紀の国の守のいこわせ給入る立場なりとぞ。政右衛門が立場といふ猶も小篠の中をわけつゝ下り、山中と云立場にいたる。山上より此所まで一里十町ばかり下れると云。右にしば切地蔵あり。やゝ行て霧はれわたり、

四方の山々あざやかにみゆ。富士見たいらといへる所のよし、きつるに、ふじの山のみくもりて見へぬぞうらみなる。遠く川水のながれ行は黄瀬川なるべし。南の方に幾重ともなくつらなれる山

あいより、虹のたちのぼるけしき、いわんかたなし。

左右に松の並木あり、上長坂を下れば、篠原の立場

にいたる。人家山中よりはつきくし、左の方に見はらし屋といふ家名あり。げにも見はらしよき所なり。

下長坂を下りゆく。荷付し馬の膝おりて、たふれし

あり。黒かりしが黄になんぬといへる詩もおもひ

出らる。三つ屋といへる立場を過て、右に覚源山松

雲寺といふ法花寺あり。是より三寫まで一里半有

といふに力を得て、小しぐれ・大しぐれなどいふわたりの

をこへ、左に一の山七面堂あり。接待の茶をすむ

といふ一の山の立場をこゆれば、坂を下る事急也。

曰ころばしといふ立場あり。塚原なり。今井坂を下る事

かはら前の橋をわたり、三寫の宿につく。右に三嶋の

神社あり。神池の橋をわたりて、ひろ前にぬかづき、

けふ事ゆへなく儉(険)き道をわたり来れる事など思ひ

つづけてぬさ奉る。すべて三寫の宿の工夫は、かゝる儉(険)は

しき道を日ごとに行かよひて、世をわたるなり。汗も

して、いき杖たてゝあゆみ、くるしき折々には、のぼれば

くだるくくと、ひとりの侍るをきくに、げに一たびは

のぼり、一度はくだる世中に、さがしきを行ふて、幸を

もとむる小人の心こそあさましけれ。右のかたに千貫

樋あり。此あたり駿豆兩國の界なるべし。宿のうち

幕うちて、菊地内記泊といへる札あり。これは紀の国の

守みたちにつかへて久しく、相しれる友なるに、二とせ

三とせ見る事なかりし。日高ければ、いまだ宿にはつかじ

と思ひつゝ、ゆく道にして、輿の簾をあけて、「こしたて

よ」といふ聲す。あ(は)やとみるまにそれなり。あまりに

うれしく、輿さしよせて物語るに、かれもこれも同じく

官遊の人なれば、しばらくも止る事あたわず。蓋をかた

ぶけて語るといひし古ごとも思ひ出られて、西と東に

行わかれぬ。こゝは木(黄)瀬川の東なり。長沢村八幡宮の

まします所は、治承四年十月廿一日、九郎判官、奥州

より下て、鎌倉殿に初て對面し給ふ所とまき。

「龜鶴觀音入行道一町」とかける碑、右の方にみえし。

⑭ かのきせ川の龜鶴が、富士のみかりに、工藤左衛門とゝも

にふしたる事など、とりあつむれば、東鑑・曾我物語

などよむ心地す。車返しといふ所を過て、沼津の城下

に入る。水野出羽守の家士、問屋のものと友に出て、その

よしを申す。川を左りにして行けば、右に浅間の社

あり。けふはこねの山をこしてより、にわかには鄙びたる

風俗にして、だみたること葉をきく。あかしや金兵衛が家

をやどりとす。三月朔日、天氣よし、沼津の宿を出れば、

右に浅間の社あり。輿の右なる簾をかゝけて、はじ

めて富士の雪をみる。あしたか山、前に横たはれり。

道平らかにして、きのふのけはしきに似ず。諏訪八幡宮・

栄間寺あり。此ほとりの村々、葦の檜垣多し。やしろ

の鳥居、多くは右にして、石もてゑ(彫)れる横額あり。松長村のほとりより富士をみるに、しばしがほどに雲たちおゝいて高根を見ず。村々の家なみ都ちかき田舎のごとくにして、大きな松あり。左右にくれなひの椿さかりなり。椿林といふ。これまで駿東郡にして、富士郡

江尾(尻)村のあたりは、富士山の正面ときくに、雲霧はれてあざやかに見ゆ。あし高山の横たはれるも、いつしか右

の方にみやられ、ふもとに野径の草むら・木だちもの(物)ふりしは、かのうき鷹が原にして、原といふ宿の名も是

によれるなるべし。男嶋・女嶋などありときけど、さだかにもみえわかず。白隠禅師のすみ給ふときく松蔭寺

は宿の中なれば、輿よりおりてあゆむ事あたはず。左のかたに見すべしつ、柏原の立場が鰻口(魚へんの麗)よしとききて、

ある家にたちいりて味ひみるに、江戸前の魚とは、さま

⑮ かはりて、わづかに一寸四方計りにきりて串にさし、つかねたる藁にさし置、長くさきたる形とは大に異なり、味も又佳ならず。元吉原のあたり、松林のうちをゆくに、

しばらく富士を左にみるは、道の曲れる(故)なるべし。川合橋を渡りて、吉原の宿に^入る。宿の人家賑ひなし。是より^{富士}ふじをしりへにし、また右にみつゝゆく。元市場の立場有。

右に富士大宮口の道あり。富南館と額かけし茶店有。うかい川をわたりて、右に富士の白酒とてうる家多し。

富士山の圖をもひさぐ。富士沼のほとりをゆくに、浦風高く、松の梢にむせびて、かの水鳥の羽音に(驚し)平家の事も思ひ出らる。海道一の瀬早きなりときへ。

富士川にのぞめば、右に水神の森あり。舟役のもの舟を並べて、輿ながらかきのせつ、げに棹さしわぶる流れなれど、とかくして向ひのきしにつく。巫峡の水のやすき流れといひし人の心も空おそろし。岩淵の庄屋常盤屋といふものは、もとよりしれるものなれ。庭に大きな蘇鉄あり。立よりて見給ひてよと云

にまかせて立より、かけまくもかしこき神の駿河に御在城の頃よりありし樹なりなどかたる。此あたりの家々、栗の子もちをひさぐ。蒲原より由井迄

は家つゞきにして近し。みなあまの子の家にして、夜のやどなまぐさといひけんたぐひなるべし。左は田子の浦つゞき、藻塩やく煙りたちのぼるけしきなどは、

いふもさらなり。右にはせを天神道あり。富士浅間社・豊積神社は、延喜式にもみえたり。由井川をわたり、倉沢の立場にいたる。望嶽亭といへる酒屋には、松

⑯ 平近江守の下り給へる従者多くみえたれば、東隣

の家にいこぶ。折から雛遊びの棚ありて、花瓶に花こちたくいれたり。例のみさかなに、よきあはび(盆)さだおかやありと問ふに、うりつくしてなしといふも

ほいなく、雛棚にのせし蛤四つ、五つ、焼かして酒汲。定家卿の「駒なつむ 岩城の山・・・」とよませ給ひしは、この薩唾峠の事なりとぞ。南郭翁が芙蓉館

の壁に、この処より富士を見るかたをながきて、東海道の景色、これに過たるはあらじと、つねづいへるよし。智山上人のことのはまで思ひ出つゝ、輿

よりおりてかちよりゆく。あまたたびかへりみ見るに、
 雲深くして、富士をみず。あし高山・伊豆の岬はるか
 に見わたされて、浪こももとうち寄る海しらす、
 何やらん鳥のむれぬるは、潜める魚をうかぐなる
 べし。此山のすそに、細き道あり。これいにしへの道
 なりとぞ。くきが崎・袖師の浦・こぬみの濱も此あたり
 なり。一番坂・二番坂・蜂が沢・二軒茶屋・山神平・午房（坂）・
 葛籠坂・女夫坂・切通し坂などいふつづらな（お）りなる道
 をこへて、西村にいたる。家ごとくに鶏冠海苔をひさぐ
 沖津の。沖津川わたるに、蓮台といへるものかきすへて、
 輿をゆひつけつゝ、かち人高くさくげゆく。右に身延山
 の道あり。沖津の宿にいれば、先清見寺はいづく
 問ふに、いましばしが程なりといふ。右のかたに石坂あり、
 三曲にして門にいれば清見寺なり。庭に大きな梅の
 木横たわりたり。客殿の椽に永世孝享の額あり。又
 諸佛宅の三字は朝鮮の青螺山人の筆なり。此門前は
 清見が関の跡なりといふ。春の海づら清して、右に

①7 三穗（保）の松原さしいで、田子の浦遠し。かゝる詠（眺）めを
 さし置て、書院の庭に石を置み、水はしらせたら
 んもいかゞならんと、さしのぞきしまゝにて出ぬ。寺を
 いでく吟行すれば、夕日斜に、石の間を流るゝ細き
 川あり。はたうち川といふ。これ庵崎のすみだ川
 にや。十六夜の日記に、「古しす波の白き縋をうちき
 するやうに見ゆる」といだし、清見瀧のながめは心
 しみて、かたかくしく袖の露に月もやどさまほしき

夕ぐれなり。庵原川を渡りて江尻の宿につきぬ。府中
 屋茂兵衛が家があるじとす。二日、空はれたり。夜明て
 たつ。けふは紀の国の守の嶋田の宿をたゞせ給ひて、
 鞠子に昼休せ給ふときけば、道にて行あひ参らせん
 よりは、かたへにさけて、行過し参らせんと、心いそぎぬ。
 巴川をわたりて、左に七面の社有。又又能寺観音の道
 と、清水に行道あり。三穗（保）神社もみゆ。十七夜山手
 禅寺も左のかたにみゆ。土橋をわたりて立場あり。
 左に草薙神社の道あり。村の名もまた草薙とよぶ。
 小吉田の立場にいたれば酒屋あり。小き桶に鮓を
 つけてひさぐ。長門鮓といふ。味よろし。栗原といふ村
 のわたりにて、垣根に山吹の咲そめしも、げに栗のみ
 の黄なるゆかりあり。梶原景時がうたれし狐が崎、この
 わたりならんと、輿かくものにとふに、「これよの跡の右の
 かたにみえし山を、梶原山といふ」といへり。やゝありて
 府中につく。駿府の御城は、慶長のとし、かけまくも
 かしこき神のましませし所と、きくにも空おそろし
 く、輿のうちに蹲りてすべ。実に御城下の賑ひ、他に

①8 異なり、去年焼し所もみえたり。家々籠細工の
 もの見へたりとも、さきをいそげば、くわしくもみず。古しへ
 阿倍の市といひしも此わたりにや。安倍川のこなたの
 家に、臼つく音して、たすきかけたるわかき女の、餅
 をねるさまおもしろく、しばらく輿をとぐむ。あらた
 なる木具にもりて来るは、かの安倍川餅なるべし。
 味またよろし。安倍川の流を舟にてわたり、鞠子の方

に向ふ。高き山幕ひきわたして、口(白カ)くみゆるを何ぞと

とふに、此村の薬師佛の開帳なりといふ。村のほとり

に燈籠めくものかゝけて、墨繪に竹かきたるも興口

あり。鞠子の宿にいり、右のかたなる壽徳院といふ寺

に、輿かきいれて、しばらくいこふ。寺に大きな楠の

木あり。木の元に小祠あり。芭蕉翁が發句に「梅若

菜」とめでし薯蕷汁いかゞならんと、人して求める也。

麦の飯に青海苔・とろゝかけて来れり。このはたとせ

あまりさきにあひし横田三郎兵衛といふものは、この

宿のものなり。わがのほれるをきゝて来り、昔物がたり

に時を移しぬ。けふは大井川わたして、金谷に

とまらんと思へど、紀の国の守の此宿を立給はざらん

程には、日だけぬべければ、岡部にやどるらん。さあらば

先觸の状いだせし、泊りくの宿たがひて、むまやちの

わす(う)らひなるべしなど思ひわす、むまやちの、ひつじの

あゆみ近づく頃、(紀)國の守の今たゞせ給ひぬと、きくも

うれしく、さあらば道をいそへべしと立出る。右に柴屋

寺あり、宗長の跡もしたはれ、吐月峯もみまほし

けれど、甲斐なくて見過しぬ。かの夢にも人にあはぬ

といふ、うつつの山にかゝり、輿よりおりて、鳶の細みち

①9 やいじとたどりつゝ、道のべの鳶楓を手折てかざし

ゆへ。右にまがり、左におわて、いと心ほそし。策牛村・

上之方村などいへる所なり。此所に珠数のごとくなる

ものひさへは、かの十團子にして、貴成天地数といひし

垂加翁の詩も思ひ出らる。十石坂をこへ、岡部の宿に

かゝり、横うちのなはてを過、朝比奈川をわたり、田中

を經、八わた橋をわたる。右に藤枝道あり。むかひに

八幡道あり。藤枝のかたに折れて行に、人家やゝ

にぎわひあり。近き頃焼し跡もみゆ。右に蓮生寺

あり。せと川をかちわたりして、右に西福寺道あり。

左に鎌口(池)堂六地藏あり。日もはや暮なんとするに、

こよひかならず大井川を徒わたしせんとて、輿かく

ものゝ足はやし。従者もおくれじとはせつきぬ。くろ

うなりて嶋田の宿につきぬれば、見すこせる所多し。

嶋田の宿には、挑灯・たい恚星のごとくかゝげ、河原に

むかふ。藤枝のほとりより雨すこしふり出しが、爰に

いたりて、西風はげしく、空は墨をすりたらんやう成

に、雨さへふりまさりぬ。輿は蓮臺の上にくひ付て、

高くかゝげ、たい恚うちふりて、海上の方にあゆみゆく。

河原の石のおとなりわたりて、物すこき

に、もろ人、よひく

といへる聲を出して、高くかゝげ行めり。聞しにも似ず

河の水あせて、おもふさまにむかひの岸につく。また河原

を右へ、土橋を渡り、足なふみあやまちぞ、なかかたみ

にいましめて、くらき道をたどりく、挑灯の光り

をたのみて、金谷の宿につく。酉の時なかば過るころ

なるべし。宿を松屋幸右衛門といふ。名におふ大井川も、

②0 やすらかにこしたりと思ふにうれしく、衾かつき

てふしぬの國なり